

教 育 委 員 会 定 例 会 会 議 録

1 日 時

平成28年6月23日（木）

開会 10時00分

閉会 10時37分

2 場 所

教育委員室

3 出席委員及び欠席委員の氏名

出席委員 前田光久委員長、森脇健夫委員、岩崎恭典委員、柏木康恵委員、
山口千代己教育長

欠席委員 なし

4 出席職員

教育長 山口千代己（再掲）

副教育長 木平芳定、次長（教職員担当）浅井雅之、

次長（学校教育担当）山口顕、次長（育成支援・社会教育担当）中嶋中、

次長（研修担当）中田雅喜

教育総務課 課長 長崎敬之

教職員課 課長 小見山幸弘、班長 岡村芳成、主査 中西祐司

生徒指導課 課長 芝崎俊也、子ども安全対策監 山口勉、班長 山田喜久

5 議案件名及び採択の結果

該当なし

6 報告題件名

件 名

報告1 三重県いじめ問題対策連絡協議会委員の任命について

報告2 平成29年度三重県公立学校教員採用選考試験の申込状況について

報告3 伊勢志摩サミットに係る取組について

7 審議の概要

・開会宣言

前田光久委員長が開会を宣告する。

・会議成立の確認

全委員出席により会議が成立したことを確認する。

・**前回審議事項（平成28年6月9日開催）の審議結果の確認**

前回定例会審議結果の内容を確認し、全委員が了承する。

・**議事録署名人の指名**

森脇委員を指名し、指名を了承する。

・**会議の公開・非公開の別及び進行の確認**

会議の進行は、報告1から報告3の報告を受ける順番とすることを決定する。

・**審議事項**

報告1 三重県いじめ問題対策連絡協議会委員の任命について（公開）

（芝崎生徒指導課長説明）

報告1 三重県いじめ問題対策連絡協議会委員の任命について

三重県いじめ問題対策連絡協議会委員の任命について、別紙のとおり報告する。平成28年6月23日提出 三重県教育委員会事務局 生徒指導課長。

説明は、山口子ども安全対策監が行います。

（山口子ども安全対策監説明）

それでは、ご説明をさせていただきます。まず、1ページをご覧ください。この三重県いじめ問題対策連絡協議会委員につきましては、本年の4月18日の教育委員会定例会におきまして、人事異動に伴う委員2名の交替についてご報告をさせていただいたところでございます。この名簿のちょうど中段の部分でございまして、下から2行目、子ども・家庭局次長、その一つ飛んで上、津地方法務局の人権擁護課長のお二人でございまして。

右側の太い線で囲んであるところが、今回の新委員ということでございます。

その前に、まず2ページをご覧ください。一番上段にございますのが、国のいじめ防止対策推進法でございます。中段が本県の三重県いじめ防止基本方針でございますが、それぞれ下線を引いておるところをご覧くださいますと、本協議会を構成する各機関、団体が示されているところでございます。なお、一番下に書きましたのは、本協議会の設置の条例でございますが、ここを見ていただきますと、第3条では委員15人以内となっておりますが、14人の委員で構成をしているところでございます。

なお、第4条のところを見ていただきますと、2項では委員の任期は1年ということで、7月1日から6月30日までを1年ということで任命をしてございます。なお、3では、委員は再任されることができるとなっております。

お戻りいただきまして、先ほどの名簿に戻っていただきたいのですが、1ページでございます。先ほど見ていただいた法あるいは基本方針に基づきまして、委員を構成する各機関、団体に委員の推薦を依頼しておりましたところ、この一覧のようにそれぞれ推薦をいただきました。

なお、名簿の一番上の部分、学識経験者につきましては、現委員である鈴鹿医療科学大学の藤原教授が、本県がいじめ防止基本方針を策定する際にもかかわっていただいております、いじめに関する見識が高いということで、引き続き、委員をお願い

したいと考えております。結果といたしまして、先ほどの2名の人事異動の部分も含めまして、現委員からの変更はなく、全員が再任ということでございます。

会議は年2回の開催を予定しておりまして、これまでは7月もしくは9月には第1回の会議をやっておりましたけれども、今年度、文部科学省による調査、これははじめも含みます暴力行為であるとか不登校であるとか、そういったことを全て調査するものでございますが、これが内容の一部に変更もございましたことから、例年より遅れておりまして、この公表の時期を文科省に確認をしながら日程調整を進めてまいりたいと考えております。現時点では10月ごろに開催したいと考えています。

説明は以上でございます。よろしく願いいたします。

【質疑】

委員長

ありがとうございます。委員さんの交替といたしますか、ご意見、ご質問ないですか。

今のところ、悪いニュースは耳に入ってきてませんが、それこそ、いつどこで起きるか分かりませんので、しっかりとよろしくお願い申し上げたいと思います。

—全委員が本報告を了承する。—

・審議事項

報告2 平成29年度三重県公立学校教員採用選考試験の申込状況について (公開)

(小見山教職員課長説明)

報告2 平成29年度三重県公立学校教員採用選考試験の申込状況について

平成29年度三重県公立学校教員採用選考試験の申込状況について、別紙のとおり報告する。平成28年6月23日提出 三重県教育委員会事務局 教職員課長。

1ページをお願いいたします。申込状況について、1ページのような形で取りまとめをさせていただきました。左の欄が29年度採用、今年度実施の試験の申込状況でございます。その右に28年度採用ということで、昨年度実施した試験の状況を示させていただきます。まず、29年度採用の申込者数の合計欄を見ていただきますと、3,201人ということで、この3つ隣でございますが、平成28年度、昨年度は3,234人ということで、人数的には少し申込者としては減っているというところでございます。

その中で採用見込数は今年度につきましては、477人、昨年度は514人ということで、もともとの採用計画上の数が、今年度は7.2%ぐらい、昨年度に比べて減っている中、実際申し込みいただいた方は、33人の減で1%程度ということで、おおむね昨年程度、それ以上の申込者時点での倍率が確保できたかと考えております。

平成29年度採用の倍率については、左から3つ目の欄にお示しさせていただいておりますが、小学校であれば4.2、中学校であれば7.7ということで、平成28年度昨年度実施の申込者時点での倍率と比較いただくと、おおむね昨年より少し多いという形になっているところでございます。

その下に選考種別の内訳をお示しさせていただいております。特に目立ったところ

としては、一番下のところでございますが、教職経験者特別選考Ⅱ、これは講師の経験のある方が、それぞれ受験していただく部分ですが、昨年度と比べて108人応募者が増えているということで、講師経験をもとに、この区分で受験をしていただく人数が増えてきているという状況がございます。

次の2ページです。それぞれ校種別の教科別の人数をお示しさせていただいております。見ていただきますと、中学校であれば社会であったり、保健体育が200人近い数字であったりとか、高校でも数学、保健体育が多い数字という形になっております。

昨年の申込者数との比較でいきますと、ほぼ同じような傾向で、昨年度も例えば高校の保健体育であれば、190という形でお申し込みいただいていたので、引き続き181人ということで、保健体育については多い状況が続いているところです。状況はおおむねこのような形になっているということで報告をさせていただきます。

3ページは、これまでの申込者数と受験者数、1次合格、2次合格の20年度以降のものを表とさせていただきます。29年度今年度の欄に申込者数を入れさせていただきます。

この申し込みにつきましては、先般、5月9日の教育委員会でも報告させていただきました。5月13日以降、6月2日まで申し込みという形で申し込んでいただいた中身を取りまとめたものでございます。

今後のスケジュールでございますが、7月23日（土）に1次試験、8月10日に1次の合格発表を予定しております。以降、8月18日から8月30日までの間で2次試験を実施し、今のところ、9月下旬に最終合格という形でとり進めたいと考えているところでございます。申込状況は以上でございます。

【質疑】

委員長

報告2、ご意見、ご質問はよろしいですか。

岩崎委員

強いて言えば、先ほどちょっと説明のあった、1ページの一番下の教職経験者が今年108人、去年に比べると増えている。これは過去のデータ見てないのですが、そういうふうに変化するものですか。

教職員課長

昨年度から、この教職経験者特別選考Ⅱの制度を変えておまして、今までは5年の中で36月以上の講師経験プラス、去年、合格した人で、今年、2カ月以上講師をしている方については、この区分で受けることができるという形になっておまして、その分が増えております。昨年度実施した段階でも、200人増えて、今年また100人増えてということで、この講師の経験がある方が、この区分で受験というのが、昨年度の制度見直し以降、増えているという状況でございます。

森脇委員

これは従来からそうなっていると思うんですが、例えば中学校の場合、申込者数は教科ごとに書いてありますね。採用見込数は全体で130ということになっている。

それはどうしてこういう書き方をされるんですか。

応募するほうから見ると、申込者数は例えば社会だと、免許を持っている数が多いから191というのは分かるんですが、採用見込数が多少はっきりとしていれば、例えば、小学校で受けようかというような判断ができるかと思うんですが、そのあたりは致し方ないですか。

教職員課班長

毎年、そのあたりも検討しているわけですが、逆に本当に社会を教えたいという方は社会で受けてほしいというところもありますので、その年々で採用枠が上下することで違うところに行ってもらうのはどうなのかというところも含めて、総合的に考えて今のところはこの形でいうところを出させてもらっています。

森脇委員

分かりました。

委員長

ほかにご意見よろしいですか。

—全委員が本報告を了承する。—

・審議事項

報告3 伊勢志摩サミットに係る取組について (公開)

(長崎教育総務課長説明)

報告3 伊勢志摩サミットに係る取組について

伊勢志摩サミットに係る取組について、別紙のとおり報告する。平成28年6月23日提出 三重県教育委員会事務局 教育総務課長。

1ページをご覧ください。今回の伊勢志摩サミットを契機に、三重の子どもたちにグローバルな視野を持って行動する力を育むため、ジュニア・サミットへの参画や、授業等での活用など、国際理解の促進や郷土学習の取組を進めてきたところですが、去る12日の高校生サミットでもって一連の取組、ひとまず区切りがつかしましたので、全体として取りまとめたものでございます。

まず、1つ目です。「2016年ジュニア・サミット in 三重」、桑名市を主会場に、4月22日から28日まで開催されました。日本代表として三重県内から4名の生徒、男女各2名ですが、ご覧の方々にご参加いただきました。それで、環境、経済、人材育成、ジェンダーといった議題でもって、それぞれグループに分かれて討議をいただき、それぞれこの4名の方、それぞれのグループで活躍してくれたところでございます。

一連の期間の中の2日目、4月23日に、(2)にあります討議に資する視察というのが行われました。何か所か視察がありましたが、その中、2つ目の印のところですが、視察先の一つ、「四日市公害と環境未来館」においては、地元の高校生、四日市高校の生徒さんですが、9名が英語を使って案内・交流をしてくれました。英語力はもちろんですが、非常にチームワークよく対応したということで、当日、外務省の方からも絶賛の声をいただいたということもございました。

1枚おめくりいただき2ページでございます。4月25日には、県内分散型体験・交流行事として、県全体で県内の高校生28名の方が参加していただき、それぞれのコースでいろいろ体験交流をしていただきました。もちろん英語を使っての体験交流をしていただきました。28名ですが、うち、県立は19名でございます。いろいろ視察先がありましたが、迎える側としても、多気町では「まごの店」で相可高校の生徒さんが昼食を提供してくれたり、玉城わかば学園の生徒さんが太鼓演奏によって歓迎をしていただいたということもございました。

その他のおもてなしとしては、農業高校並びに農業系の学科を有する学校、全部で6校ですが、その6校において、花、プランター、スタンド花等を制作していただいたり、特別支援学校4つの学校では、伊賀組紐を使った「名札のストラップ」であるとか、さをり織りを利用した「マイ箸袋」というようなものも作って提供していただいたところでございます。

大きな2番ですが、授業での学習ということで、1つ目は、外務省が主催する「イチからわかる！サミット塾」というのを外務省が企画をしていただきました。それに対して、その下には書いていますが、小中学校21校、高校8校が受けていただいたということで、内容的には、外務省の職員によるサミットの趣旨、内容、歴史、あるいは異文化コミュニケーション、国際交流の秘訣などを学ぶ授業を実施していただいたところです。

もう一つは、国際理解・国際交流プログラムということで、県民会議が国際交流財団に委託する形で実施したのですが、参加国出身の在住外国人であるとか、留学生の方などを講師に招いて、各国の料理や遊び、スポーツなどを実際に体験しながら学ぶプログラムを実施していただきました。ご覧のとおり、ずっと数を書いてありますが、全体で91回実施され、28年度も9月までの間に30回実施して、それらの学校で授業を行っていただく予定としております。

大きく3つ目、サミット給食ということで、サミットの参加国の関係の給食を県内の全市町、県立特別支援学校で実施していただきました。予定も含んでおりますが、延べ292回の予定でございます。なお、実施に当たりましては、「伊勢志摩サミット給食レシピ作成委員会」というのをつくって、そこで22種類の参考レシピを作成したところでございます。

3ページにいきまして、「4 子どもふるさとサミット」でございます。5月14日、伊勢市で小中学校の生徒が180名ほど、大人も入れて430名の参加を得て実施しました。参加していただいた市町は14市1町でございます。内容としては、郷土・国際理解・環境学習や伝統芸能等の発表・資料展示、サミット参加国に関する各校の取組をパネル展示の形でそこに披露させていただきました。

最後、意見交流、アピール文作成、アピール宣言ということで、参加してくれた子どもたちが18のグループに分かれて、環境をテーマに意見交流を実施して、最後、地元の中学生で組織しました実行委員を中心にアピール宣言を作成して、県内に発信をしたところでございます。

「5 三重の高校生サミット」でございます。これについては、6月5日と12日の2日間にわたって実施いたしました。参加していただいたのは、高校生ほかですが、

延べ148名ということで、県外の高校生の方も一部参加をしていただきました。

内容でございますが、全体のテーマとしては、「次世代の地球に対する若者の提言」ということで、1日目の第1部については、ジュニア・サミットの日本代表あるいは体験・交流行事に参加していただいた生徒から報告をしていただいた後、交流会、ワークショップ等を実施いたしました。2日目の第2部は、テーマに関するディスカッション、最終的には提言の作成・発表ということで行っていただきました。その2つ目のところにあります、「青少年外相会合広島」、これはサミット関係閣僚会議、外相会議が広島でありましたので、その関連行事ですが、それに参加した広島の高中生にも来ていただきまして、そのときの体験を報告していただいたところがございます。

「6 配偶者プログラムにおけるおもてなし」ということで、相可高校の生徒、先生11名が、昼食会において、三重県産の食材を豊富に使った食事を提供しておもてなしを行ったところがございます。

最後、「7 その他」でございます。ふるさと通信、いろいろ今までも作ってまいりましたが、その第4版として、サミットに関連して「伊勢志摩編」を英語版も含めて、日本語版と英語版を作成して配付しました。2つ目として、三重の文化財の発信ということで、サミットの会場等、国際メディアセンターですが、そこで海女漁など、三重県の魅力ある文化財を英語版リーフレットや動画等を用いて広く発信をさせていただきます。

最後、右のページです。先ほども言いました国際メディアセンター（IMC）というのが、伊勢のサンアリーナに設置されました。これは、国内外の報道関係者のための施設ということで、いろいろ三重県をアピールするようなものも置いたりしましたが、そこがサミット終了後、一定期間、公開をされました。その中で、子どもたちに見ていただきたいということもあり、県内の子どもたちに日を決めてガイドツアーというのが企画されましたので、それについてお声掛けをさせてもらったところ、①にあります。県内の小中高校、特別支援学校の生徒さん合わせて2,200名ほどが来て見ていただきました。それから、子どもふるさとサミットと高校生サミットに参加した方についても、別途、100名の方に見に来ていただきました。

以上ですが、これ以外にもサミット推進局とか地元の市町からも、直接、いろんな学校にいろんな要請もあって、いろんな取組もされてさまざまな形で関わっていただいたということもございます。

今後、こうした取組の経験、成果を、グローバル教育の推進であるとか、グローバル人材の育成などに生かしていきたいと考えているところです。

説明は以上でございます。

【質疑】

委員長

すごくいろんなことを取組まれたということで、ご意見はよろしいですか。

柏木委員

「4 子どもふるさとサミット」のアピール宣言というのは、一回見てみたいです。

教育総務課長

すぐご用意します。

岩崎委員

知事も言っていますが、サミットの遺産みたいなものをちゃんと生かさないかんという話からいうと、子どもたち、仮に「サミット世代」と名づけたら、その子どもたちが5年後、10年後、どうなってるのかという追跡はやっぱりしたいと思うんです。要するに小さいころ、発達段階に応じて一応サミットを経験したわけです。そうしたら、その子どもたちがそれをステップにして、例えば海外に目を向けて、高校生だったら日本にいなかったらいなくてもいいんですよ。けれども、小学生だったら、それで地元に着を持って5年後、10年後、ひょっとしたら何かをやってるかもしれないという、そんなフォローアップの調査みたいなものがあるのもいいのかなという気はちょっとするんです。何かこういうことがあったとき、いつもみんな世代として多分同級生が集まったときに、記憶はみんなおもしろいことあったよねで終わるんだけど、それが本当にどういうふうの意味があったのか。特に三重県に人材として残っているかどうかということは、定量的に把握する必要はないといえませんが、やはり何らかの遺産として残っているのかなというのは、ほしいような気がするんですね。どういう形で把握したらいいのか分からないけれど。

よく市町で海外に留学するときの助成制度をやっているところがあります。それを10年続けて、僕はよく行革の場面では言うんだけど、その子どもたちが10年後に、その市町に残ってくれているのかどうか。残ってくれなくてもいいけれども、戻ってくる可能性があるのかということがないと、やはり海外に子どもたちを派遣する際の費用対効果は説明できないんじゃないか。よく言うんですけども、僕は、その大規模なものが今回のサミットに係る県教育委員会マターとしてのさまざまな行事だったと思うので、それがどういうふうな影響を与えて、そして、三重県に対するアイデンティティを高めてくれたのかというのを10年後ぐらいに確認したいなというふうには思います。すごい大きな希望です。

教育総務課長

データの捉えるものがどれだけあるか。人を追いかけてということは、なかなか正直なところできないですが、例えば、留学なら留学で希望者が増えているとかいうことは出せる。片方で今回、地元、郷土の再認識というのもテーマになっているので、出ていくのが全てというわけではないので。

岩崎委員

外に出て行った、けれど、あるいは帰ってきたという。帰ってきたというのもすごく今の三重県にとっては大きな話ですものね。

教育総務課長

どういうリサーチができるのかというのは、今すぐ思い浮かばないのが正直ですが、その辺は意識をしていきたいと思います。

委員長

教育長、よろしいですか。

教育長

難しいと思います。

森脇委員

難しいけどできないかなって。少なくとも、この4人の方がこの後、どういうふう
に生きていくのかという、興味、関心ありますね。

教育長

縛られるというのか、本人が意識過剰になってしまっただけではない。それはないで
すが、見守れるという程度だと思いますね。この行事に参加したとってずっと始終
追いかけていると、何かあおり立てられているという。それが足りないんだけど
も、何かそういうフォローアップをどうするんだということですね。私にも私の生き
方があるという、そういうことなのかと思うんですね。

課長が言ったように、全体として例えば、今回のことで留学する子が増えたとか、
姉妹校提携が増えてきているとか、そういう場合があります。そういうところは点か
ら面になるのかなと思いますけど。個人を追いかけていって費用対効果はどうだった
のかというのは、ちょっと厳しいかと。組織的なワークが三重県の学校の中でそうい
う海外に対する関心が高まってきたという尺度ならあり得るという感じがします。あ
るいは郷土教育が盛んになってくるという。あるいは、ボランティアに、ここには出
ていませんが、国際ボランティア活動で高校生も大分入っているんですね。そうい
うインバウンドを伴う通訳に三重県の高校生は積極的になってきたよねという話にな
るのかなと。ガチガチに追跡は難しいかも分かりませんが、それを追い風に何とかし
ていきたいと思います。

委員長

一部、私事で恐縮です。昨日、今日と駅でスポーツ新聞を買って読みながら来たの
ですけど、共通しているなと思いながら読んでました。特集みたいなことを書いてあ
って、中日ドラゴンズの堂上選手、タイトルが小学校3年のときにスポーツ少年団で
教えてもらった指導者からの教を頑なに守っているというんですね。バッティング
の基本を過去20年間にわたって。途中、行ったり来たり迷いもあるようですが、迷
いに入ると、小学校3年のときに教えてもらったことに帰っていくというんですね。
すごく良いなと思いながら読んでいたんですね。

今日、読んできたのはハンマー投げの室伏選手のお父さん、息子、広治さん、由佳
さんでしたか、あまりお父さん教えてないみたいなんですね。自由にさせた。例えば
ほかの走りっこをやりたいときは走りっこをやってもいいやないかというようなこ
とで。その中で本人がハンマー投げをやりたいと言いだしたときに、初めて教えて、
後は困ったときに相談に来るぐらいで。中学校のときの体験みたいでしたが。そのと
きのことを頑なに今でも守っている、やっているというような話でした。

ですので、これと無理やりくっつけるつもりはありませんが、人間が人間の一生を
という意味を司るのがどの年代、どの世代なのか。中学、高校あたりは、ものす
ごくその人の人間形成にとって、理解力も引くくめて、まだ幼児の段階ではなか
か理解力というのはないしつけの段階だろうと思うんですけど、この辺の年代にな
ってくると、理解力はそれぞれ付いてきているので、そこで本人が自ら体験したこと

というのは、僕はひょっとすると一生ものになるのかと。そういう意味で、教育の役割は大きいなと実感しながら来たのですが。

もう一つは、やっぱり体験するという事は、いろんな場面でものすごく大きいなと。例えば、直近で言いますと、幸いにと行っていいのかどうか分かりませんが、この地方、巨大地震が来る、来ると言いながら、まだその被害に遭ってないですね。東日本大震災にしたって、僕は1回だけですけど現地を見たことがあるんですけど、大半の人というのは現地を見てないと思うんですね。当然その場に居合わせてない。熊本震災もそう。映像や情報で見ているんでしょうが、もしそこに誰か知り合いか親戚か身内でも被害に遭ってれば、もっとリアルに感じられると思うんですが、どうしたって他人事。同じ国で起きているのに、同じような体験をしていないところでは、どこか自分を別なところへ置いてしまって、その教訓というのがなかなか生かしくい。

それから言っていくと、この子たちは実際にこれで経験、体験したわけなので、大きくなって、また、外から見て、帰ってきてもらえるようになってもらえるといいなと僕も願っているんですけど。

それから、どこかの場面で申し上げたいと思っているのは、サミット全体を通じてですが、これも自分が経営者になってから学んだ言葉で、よく先代の社長から「篤初誠美」という言葉ですが、我々、製造業ですが、とにかく段取りをよくせよと。何か物事に取りかかる前に、全て段取りで決まると。「篤初誠美」、「初めに篤ければ結果は誠に美し」と。だから、段取りで全てと言ってもいいぐらい結果が決まると。

今回のサミットも、無責任な言い方をさせていただきますと、これでもか、これでもかと世界的なテロとか事故、いろんなことに対する取組というのは、すごくされたと思うんですね。だから、結果的に無事故で立ち直るものに終わった。これはまさしく「篤初誠美」があったからであろうかと思っているんですけど。ことほどさように何かにとっかかるときは、しっかりと準備をして「篤初誠美」、「結果誠に美し」ということになればいいなと感じたようなところでは。

あと、よろしいですか。

—全委員が本報告を了承する。—